

非閉塞性無精子症

顕微鏡手術で6割受精

顕微鏡手術で採取した精子を使った顕微授精で、妊娠が極めて困難とされる「非閉塞（へいそく）性無精子症」の患者も「閉塞性無精子症」の場合と同様に受精率が六割を超え、妊娠率も五割以上となったことを、京野アートのクリニック（仙台市青葉区）の菅藤哲医師（泌尿器科）らのグループが確認した。

仙台の医師グループが確認

無精子症は男性不妊症の一つで、精液中に精子が認められない。百人に一人の割合とされ、精子を運ぶ管が詰まっている「閉塞性」と、精子をつくること自体が難しい「非閉塞性」がある。患者のうち八割は非閉塞性。その半数程度は精巣の一部で精子がつくられているが、従来の「精巣生検」では発見が難しい。管の手術などで妊娠につながるケースもある閉塞性と比べ、妊娠は困難と考えられていた。

菅藤医師らは精巣生検より精子を見つけやすく、患者の負担も軽減される手術用顕微鏡を採用。二〇〇六年一月から〇七年八月にかけて無精子症と診断された五十八人の精巣組織の一部を顕微鏡手術で採取した。診断では非閉塞性四十八人、閉塞性十八人。うち非閉塞性は十七人、閉塞性は十八人全員の精子を同じ日に採取したパートナーの卵子に顕微授精した。その結果、受精率は非閉塞性61・6割、閉塞性63・6割。初回の治療による妊娠率はそれぞれ52・9割、55・6割で、ほとんど差がなかった。パートナーが妊娠した患者の中には、別の病院の精巣生検で精子を見つけられず、非配偶者間人工授精（AID）を勧められたケースも少なくなかったという。研究結果は二月六日付の米医学専門誌に発表した。

菅藤医師は「非閉塞性でも、閉塞性と変わらない受精率、妊娠率を得られることを証明できた。子どものお出生を知る権利などの課題を考えると、AIDは最終的な選択肢であるべきだ。今後は出生率も調べていきたい」と話している。

「閉塞性」と同様の成果

患者のうち八割は非閉塞